保健養護　　けがに関する校内への取り組み　～若年層学級担任へのアプローチを通して～

1　主題設定の理由

学校では多くのけがが発生している。大別すると、保健室で処置できるものと医療機関の受診を要するものがある。受診するものの中には手術や入院を必要とするもの、障害を残すものまでもが含まれている。近年、保護者の価値観が多様化し、応急処置の仕方や保護者への対応の仕方次第では、トラブルを招くこともあり、けがに関する対応はより慎重に行うことが求められている。けがについては、養護教諭の的確な対応がもちろん重要ではあるが、それ以上に子どもと一番密接に関わる学級担任の対応も重要である。

しかし、学級担任の中には、子どものけがの程度や状況を確認していなかったり、けがが発生した時の保護者への連絡が不十分だったりと、危機意識の低さを感じる人も少なくない。その原因の一つとして、学級担任の若年化があげられる。本市は、ここ数年、若年層の学級担任が増加し、小学校教諭では、30 歳以下の教諭が 30%を超え、新規採用者数も毎年 100 人を超えている。そのため、けがについての知識や経験が十分ではない学級担任が多くなっている。また、それらを支える支援体制も学校によっては位置づけられていないのが現状である。

これまでの様々な調査研究をみてみると、学校でのけがの発生状況や予防については多数あるが、学級担任とりわけ若年層学級担任に着目したけがに関する調査研究は見当たらない。

そこで、本研究では、子どものけがに関する対応について、養護教諭及び若年層学級担任への意識調査を実施し、学校管理下でのけがに関する対応について、養護教諭と学級担任との連携という視点から、学級担任への効果的な支援の在り方を探りたいと考え、本テーマを設定した。

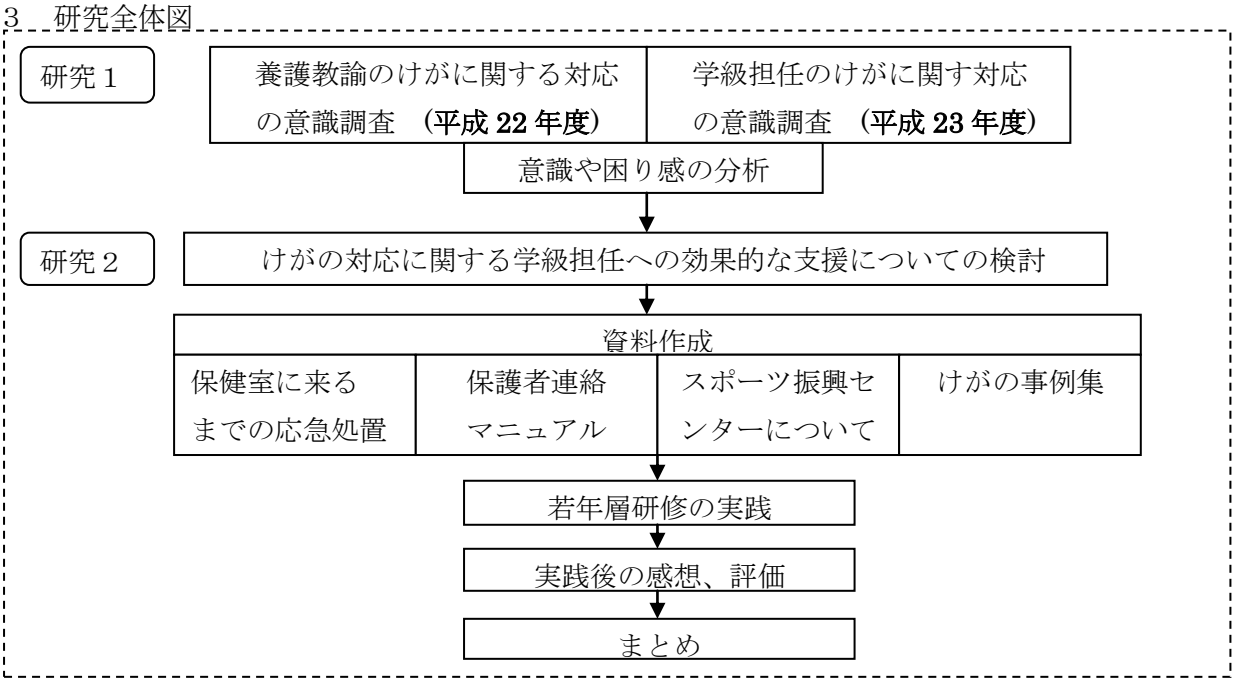
2　研究目的

（1）　けがに関する対応について、養護教諭と若年層学級担任の意識調査を実施し、困り感を明らかにする。

（2）　養護教諭から若年層学級担任へ、けがの対応に関する支援のあり方を明らかにする。

※「若年層学級担任」とは各学校で行う若年層研修の対象者もしくは、研修体制のない学校は５年経験未満の学級担任のことを示す。以下、「若年層学級担任」のことを「学級担任」と示す。

3　研究全体図



4　研究１『養護教諭及び学級担任の意識調査』

学級担任の意識調査からは、応急処置に最も多く困り感を感じていることが明らかになった。応急処置自体が分からないという学級担任が多くおり、処置への不安も抱えていた。養護教諭の学級担任への困り感からも、その場でできる処置をしていないことや、傷病状況を確認せず来室させることがあげられていることから、１つの支援課題が見えた。

養護教諭の学級担任への困り感の中で、最も多いものは保護者連絡についてであった。けがの症状や発生状況の説明の仕方、事実が伝わりづらい話し方などについての意見があげられた。また、学級担任も保護者へ連絡をするけがの程度の判断や状況の伝え方について悩んでいることがわかった。

養護教諭が病院受診を迷うことと同じように、学級担任も小さなけがで保健室へ行かせてもよいか、どこまで学級で手当てしてよいかなど「保健室に行かせるかの判断」に困り感を持っていたことは、養護教諭が保健室経営方針を年度当初に提案し周知することやその都度伝えていくことにより、改善されるのではないかと考える。また、養護教諭と学級担任どちらも困り感のある「校内体制」「養護教諭不在時」の対応「スポーツ振興センター」の仕組みなどについても保健室経営方針の中で周知する必要がある。特に、スポーツ振興センターについては、学級担任から仕組みがわからない、災害報告書の書き方がわからないといった意見があげられていた。また、養護教諭からも、学級担任の災害報告書の書き方について困り感を持っているという意見があった。

養護教諭、学級担任双方からあげられていた意見としては、どちらもけがの予防に関する保健指導の必要性である。多くの子どもが１日の大半を過ごす学校でけがは起こるものではあるが、予想される危険は未然に防ぐことも必要である。若年層学級担任はけがの知識や経験が十分ではないので、けがの発生事例を知り、危険を予測できるにようになるための支援が必要だと考える。

学級担任からけがの対応について「困っていない」という意見も出てきた。その中には、「保健室が丁寧に対応してくれる」「保護者連絡をするときに養護教諭からアドバイスをしてくれる」など、学級担任への支援方法を探る上での手がかりになる意見があげられていた。

5 今後の予定

養護教諭と学級担任の意識調査を行った結果、学級担任に対して支援すべき内容が導き出された。今後は、研究２『養護教諭から若年層学級担任への支援のあり方』として以下のような資料を作成し、若年層研修の中で活用した後、その支援が有効に行われたかを評価したいと考えている。

（１）応急処置マニュアル

けが発生時にすぐに行える応急処置マニュアルを作成する。

（２）保護者連絡マニュアル

連絡をするけがの程度や、状況の説明の仕方、言葉遣いの注意点などを載せたマニュアルを作成する。

（３）スポーツ振興センターについての資料

スポーツ振興センターの仕組みや災害報告書の書き方についての資料を作成する。

（４）けがの事例集

けががおきた場面をシュミレーションでき、けがの予防につながるようなけがの事例集を作成する。